

アメリカの大学アドミッションとアドミッション・オフィサーの新しい課題

New Issues of College Admissions and Admissions Officers in US Colleges and Universities

松井 範惇

MATSUI Noriatsu

1. はじめに	3
2. 大学入学者の選抜（アドミSSION）と統一テスト	4
2.1 大学による学生の選抜と学生による大学の選択	4
2.2 SAT か ACT か	5
2.3 統一テストの位置づけ	9
3. 統一テスト不要アドミSSION	11
3.1 アドミSSIONの動向	11
3.2 NACAC の対応と統一テスト不要アドミSSION	13
4. アドミSSION・オフィサーの役割	15
4.1 プロフェッションとして	15
4.2 ヘリコプター・ペアレンツとステルス志願者	18
4.3 奨学金	19
5. おわりに：今後の課題	21
ABSTRACT	23

アメリカの大学アドミSSIONとアドミSSION・オフィサーの新しい課題

松井 範惇*

要 旨

アドミSSION・オフィサーの業務、責任と役割は、アメリカの大学にとって極めて重大で、多様である。プロフェッショナル集団としての第1の仕事は入学者の選抜であるが、多くの変化（高校卒業生の減少、大学間競争、学生の多様化への対応、親の期待・介入、奨学金プールの減少など）に直面しつつある現在、ますます複雑化する状況にある。

本稿は、入学者の選抜、特に、アドミSSIONの決定に果たす統一テストの点数の扱いに関して、全米での最近の議論を検討し、各大学での学生選抜方針（アドミSSION・ポリシー）の変更などの傾向について、より複雑化し、多様化するという観点から考察を加える。

さらに、プロとしてのこの職能集団の人々の属性・特性、考え方や彼らが直面する問題を探り、大学アドミSSIONのこれからの課題を整理する。すでに過酷な仕事をこなしているアドミSSION・オフィサーの役割は、今後一層複雑で困難なものとなるであろうということを検討する。

キーワード

アドミSSION、アドミSSION・オフィサー、統一テスト、SAT/ACT、ステルス志願者、奨学金

1. はじめに

アメリカのほとんどの大学で、入学者の選抜は「アドミSSION・オフィサー」とよばれる専門の人達が担当している。「ファカルティー」とよばれる教員団に属する人々は、アドミSSIONの決定にはほとんど関わらないといわれている。アドミSSIONに関わるアドミSSION・オフィサー達とファカルティー（教員）との連携関係は、各大学でさまざまである。大学院やプロフェッショナル・スクールでは、教員団によって構成される入学者選抜委員会の役割りは大きい。本稿で取り扱う学士課程での入学者選抜で、規模の極めて小さい大学では（アドミSSION・オフィサーという専門家を雇うことをせず、できず）、教員がアドミSSIONに果たす役割りが大きいところもある。しかし一般的には、アドミSSIONにおける教員の仕事は、（1）アドミSSION・ポリシー（策定）委員会のメンバーとして、その策定、変更、

実施状況の監督などに携わること、（2）学内で、キャンパス訪問中の高校生などに授業を公開し、面談したり、専門領域に関わる学内施設などを説明、案内すること、そして（3）学外へ出掛けていき、高校やその他で公開講演会、大学説明会、卒業生との会合などで、大学の授業、研究、学内の活動などについて話すこと、である。上の（1）はメンバー（委員会の委員）になると業務となるが、（2）と（3）はあくまでもボランティアとして、普段の授業と研究に差し支えない限りで、アドミSSION・オフィスからの要請に応えるものである。

教員の果たす役割りは、アドミSSION・ポリシーのレベルでの政策決定に参画することが主であって、新入学生のリクルートやアドミSSION（選抜）のプロセスそのものには直接関わらない大学が多い。入学許可（アドミSSION）を出した高校生に個々に手紙を出しぜひ来るように勧誘したり、アドミSSION後にキャンパス訪問して

* 大学評価・学位授与機構 評価研究部 教授

くる高校生との面談の要請に応じることも時々あるが、その頻度と規模は大学によって、あるいはアドミッションのディーンの考え次第で、まちまちである。例えば、ラトガースのように教員の参画をより積極的なものに、適切なものに見直すところもある¹。

本稿の第3.2節でふれるように、NACAC（全米大学アドミッション・カウンセリング協会）という専門家の協会がある。そのメンバーは、大学のアドミッションおよび財政支援関連のオフィサー達、大学のエンrollment・マネジメント（学生数の調整など）の専門家、および高校あるいは独立系の進学カウンセラーで、現在1万1000人以上の専門家集団として、1937年の創立以来さまざまな活動をしている。中等教育から高等教育への移行の過程で、その質を高く維持することによって、社会的・倫理的責任を果たすことを目的としている。

ハーバード大学がカレッジ・ボードと共催で毎年行っているアドミッションのための夏のセミナー・ワークショップ（Harvard Summer Institute on College Admission）では、その主な対象者は、教員ではなく上のNACACのメンバーのようなアドミッションの専門家である²。

学生の専門、専攻、学部・学科は、一部のプロフェッショナル・スクールを除いて、入学後1年あるいは2年目の半ばまでに決めるので、大学側は新入学の学生の全般的な質の高さおよびその多様性を確保しようとする。アドミッション・オフィサーの重要な仕事は、入学許可を出す学生の質を落とさないで、いかに大学の伝統、学風、理念、特徴に合う学生を見つけ出し、この大学に沢山応募させるかである。そして、入学許可を出した学生に、個々の学生が入学許可を得た大学の中から他大学ではなく自大学に、どれだけ多く入学手続きをするようにさせるかでその手腕が問われる。

アドミッション・オフィサー達の仕事で、バランスを取らねばならない重大なことは、入ってくる学生の質の高さを保つ一方、大学での学びに意欲のありそうな（オフィサー達は、志願書類の中

にhookやsparkがあるかを見るという）志願者のなかから、入学生の多様性、つまり男女比、各学生の望む専門分野、出身地域、人種比、親の所得階層の幅、出身高校の種類、高校の学年での順位（トップ5%、10%、25%など）、また留学生数、などでいかに大学の特色・強みとのバランスを取るかである。彼らの勤務・仕事の状況が最近大きく変化しつつあると言われている。その要因には、最近の10～15年のアメリカの中等教育の変化、大学の競争状況の変化、奨学金の状況、高校生の親の意識の変化などが関わっている。

本稿では、まず入学者選抜に関する最近の傾向を、特に標準統一テスト（standardized tests）の変化とその位置づけを通じて検討する（第2節）。次に、第3節で統一テストの点数を使わないアドミッションの最近の議論を展望する。その後で、アドミッション・オフィサーのさまざまな状況、意識などを、アンケート結果などに基づき概観することで、アメリカの大学のアドミッション・オフィサー達が抱えている問題を考察する（第4節）。これらに基づき第5節で、アメリカにおける大学入学者選抜のプロセスと、それに関わるプロとしてのアドミッション・オフィサーの今後の課題を提示し、まとめとする。

本稿では、第3節で入学者選抜に関して、「大学入学者選抜プロセスにおける『標準統一テスト（SAT/ACT）』の役割りはますます多様化する」という議論を中心に考察を進める。アドミッション・オフィサーに関わって、「アドミッション・オフィサーの役割は、今後一層重くなり多様化する」という予見を立てて、第4節でその議論がなされる。

2. 大学入学者の選抜（アドミッション）と統一テスト

2.1 大学による学生の選抜と学生による大学の選択

アメリカの大学において入学者を選抜するプロセスで、主に1回の筆記試験・学力試験だけに

¹ 以下のURLを参照：<http://senate.rutgers.edu/asracfacultyroleadmissions.html>、また、アドミッションのプロセスで教員は何をすべきか、教員はどこにいてしまったのか、という論争も古くからなされている。例えば、以下のものを参照されたい。<http://www.insidehighered.com/views/2006/10/12/delbanco>（2009年5月現在）

² 2009年用は以下のURLを参照：<http://www.fas.harvard.edu/~sica/index.htm>（2009年5月現在）

よって入学許可（アドミッション）を決めるところは殆どないことは良く知られている。全米で行われる共通の統一テストは年に何回も実施される上、高校の最終学年だけが受けるのではない。そして、各大学独自の筆記試験というものは存在しない。「学生による大学選択」と「大学による学生選抜」が、長期間にわたる両側からの相互プロセスであることはあまり知られていないと思われる。長期間とは、高校生にとっては最後の年（4年生）が始まって（8、9月）すぐ開始（10月頃）され、卒業直前の5月頃までが学生にとっての期間である。

統一テストを受ける期間だけでもかなりの長期間である。中学校最終学年の8年生から高校1年生（9年生）の頃から、PSAT/NMSQT（Preliminary SAT/National Merit Scholarship Qualifying Test, 全米での成績優秀者表彰と奨学金授与のためのテスト）を受け始め、SAT（全米で年に7回実施）やACT（年に4～6回実施、州によって異なる）を高校4年生以前に受けると、合計で4～5年の期間となる³。

大学（アドミッションズ・オフィス）にとっては、学年度が終わる5月末か6月初めから、直ちに全国または地域の高校などへ大学紹介のための訪問が、6～7月にいっせいにこなされる。10～11月には各地からの先生に引率された高校生や、親子または学生のグループが連日のようにキャンパス訪問をする。その間、入学願書（entrance applications）を送付し、受け付ける。個人別にファイルを作り、一つ一つ念入りに見てゆく。多くのところでの願書受付は12月末や、1年半ばとか1月末や2年半ばなどが締め切りである⁴。大学内や学外でのインタビューやキャンパス訪問、親子での面接など、推薦状や統一テストの点数など、願書を完成させたら、実際の選考作業が始まる。その間、不足添付資料の有無など、個人ファイルが完成したかどうかの問い合わせがあり、大学の入学許可（acceptance）の発送や連絡を順次、次々

に行う。高校生にとっては、入学許可が来たあと大学を決めるためのさらなるキャンパス訪問をしたり、ローンや奨学金をもらえるかどうかの決定を受取り、そのうえで自分の行く大学を決めたら入学手続き（4月末や5月末などが締め切り）をして、8月末や9月初めの新入生オリエンテーションとその前の入寮の手続きとなる。この間1年3～4ヶ月で1サイクルとなるこのプロセスで、大学のアドミッションズ・オフィスにおいてはコンスタントに仕事が流れてゆく。この全体のプロセスは、アドミッションの責任者（ディーンであったり、ディレクターなどというタイトル）が副学長の1人であることもあるが、その能力とリーダーシップの下で、若い熱心なスタッフの猛烈な仕事ぶりに支えられている。

こうして、「長期にわたる」、「大学による学生選抜」と「高校生による大学選択」の両方の相互プロセスがあってその後、その年の新学年8月末頃、または9月初め頃の新入学生をキャンパスに迎え入れることとなるのである。その時、トランスファー（編入）学生として、2年次生へ、または3年次生へと他大学から移ってくる学生がいる。大学によってその数、割合は年によっても異なるが、数%から1割前後になる大学もある。本稿では、新規に大学生活を始める学生の入学選抜を問題にするので、編入学生の選考プロセスは扱わない。

2.2 SAT か ACT か

個人別入学願書の書類（ファイル）が審査され、入学許可が出される。そのためには、各大学が独自の方式でそれぞれ、アドミッションズ・オフィスで一人一人の志願者についてのファイルを検討し、イエス（in）かノー（out）が決められる。表1で示したように、そのときこの大学でも大きな役割を果たすのが（1）高校での成績（科目ごととGPA（grade point average））、および（2）全米の統一テスト（SAT/ACT）の成績である。

³ PSAT/NMSQT はカレッジ・ボードと National Merit Scholarship Corporation (NMSC) によって実施されている。SAT は、古くは Scholastic Aptitude Test という名称であったが、1990年から Scholastic Assessment Test と変更され、1993年からは単なる SAT と呼ばれるようになった。ACT も1996年までは、American College Test の略称であったが、それ以後は単なる ACT となった。

⁴ Early admission とか Early action と呼ばれる方式では、11月1日や12月1日などが締め切りであるところが多い。また、年間を通して志願書を受付けている（rolling admission）ところは、特に締め切りはない。

表1 アメリカの大学のアドミッション担当者は入学志願者の何を見るか。

トップの10項目	%
1. 高校での大学準備科目の成績	78
2. 全米統一テスト (SAT, ACT) の成績	61
3. 高校での成績表における全科目の成績	54
4. 学年における成績のランキング (トップ10%、40%等)	33
5. エッセイ, 小論文, 作文, 随筆等	23
6. 高校教員の推薦書	18
7. 高校の進学カウンセラーの推薦書	17
8. 面接	9
9. 課外活動, 仕事, アルバイト経験	7
10. 学生の示す大学への関心度, 興味	7

(出所) *U.S. News & World Report*, August 30, 2004, p.72より筆者作成

(入学志願書類およびアドミッションのプロセス全体で選抜のために重視されるもの、すなわち、書類が揃っている志願者の中から入学許可 (admission) を出すために重要視される項目、複数回答)

全米の統一テストの成績は必要としない大学もあり、そういった大学は概して競争率は低いと言われていたこともある。SATまたはACTのどちらかの成績を提出することを必須としている大学が多い。10~15年くらい前までは、SATを求める大学が多かった。ACTを求める大学数は比較的少なかった。最近の特徴は、どちらかの成績の提出を必須とする大学が顕著に増えて来ていると言われている。

こういった変化の中で、本稿は、2000年頃以降の動向として(第3節参照)、SAT/ACTから距離を置き、点数をアドミッション決定に使わない、したがって志願書類の一部としてSATもACTも、どちらの成績も必須としない、要求しない、そういう大学が増加していることを指摘する。後に、その賛否、利点と問題点を考察する。

SAT (現在の正式名称は SAT Reasoning Test) はニューヨークに本部を持つ College Board (正式の名称は, College Entrance Examination Board) によって1926年以来運営されている。元々、アイビーリーグへの入学希望者を選別するための準 IQ テストのようなものとして始まり、どちらかという「考える力」をテストするようにデザインされている。言語、数学、論理力などをみるが、これまで2セクションで400~1600点であったが、最近、3セクションで、各セクション200~600点という表示になった。科目別のSAT (SAT Subjective Tests) が1993年から、英語、数学、アメリカ史、

生物学、物理学、化学、などの20科目で受けることが出来る。3時間45分がテスト時間で、オプションのエッセイを受けるともっと長くなる。説明、登録、休憩など全体では、4時間半となる。

ACTはアイオワ州のアイオワ市にある ACT, Inc. によって運営されている。カレッジ・ボードも ACT, Inc. も法律に基づく民間の非営利団体である。こちらは高校生が何を学んで来たかを中心にテストするよう設計されている。セクションは4つあり、英語、数学、読解力と科学である。点数は0から36点満点である。標準時間は4時間である。厳選度の高い大学での入学許可を取るためには、どちらかの成績でほぼ90%程度以上の点数をとることは必要であるといわれる。しかし、SATまたはACTどちらかの成績の提出を必須とする大学が大多数である中で、これらのどちらのテスト成績をも入学願書の一部として必要としない大学も最近増えている。

1998年から2007年にかけて、全米でSATの受験者数は30%増え、ACTのほうは43%増加している。ACTの人気の高まりで、SATの方も3セクションにしたり、科目別をもうけたり、複数回受験した時には自己の最高点だけを大学に送ることが出来る、というようにルールを変えたりしている。高校生としては、両方を何回も受けるのは大変だし、最近勧められているのは9年生(高校1年生)、10年生(高校2年生)の頃に、まずはSATとACTの両方を受けておいて、そのうちの点の高いほう、

受けやすいほう、点数改善が可能と思われるほうを11年生（高校3年生）の春に受験し、高校4年生になって大学に出す願書を完成させる点数とすることである⁵。SATでもACTでも、文章を書く力を見ることが重要視されているが、それら統一テストを必須とする大学ではそれぞれ独自の計算方法でその点数を入学許可決定のための総点に組み込むことを行なっている。

SATとACTのどちらが大学入学生としての能力をより適切に測るか、考え方・論理力重視か、それとも事実や学んできた学習達成重視か、などはいつも議論となっている。どちらも時間制約の中で答えねばならないので、そういうプレッシャーの中で、「ひねった」考え方を問題が解くのが苦手な高校生にはACTの方が推奨されることもある。逆に、単語力や記憶などがあまり得意ではないが短時間でも短い文章で論理的な思考が出来る学生はSATが奨められているともいわれている。創立1693年のバージニア州にある名門ウィリアム&メアリー・カレッジ（College of William and Mary）では、2008年秋入学への志願者数1万1636名のうち、ACTの成績を提出したのは3800人であり、そのほとんどはSATの成績もアドミッションズ・オフィスへ出している。

いずれにしても、大学への競争は2極化し始めているようである。多くの州立大学を中心とする全入のグループと、それぞれ競争をしながら入りたい大学への入学許可を取るという戦術を進めるグループが出てきているようだ。アメリカの大学進学率は60%を超えており、2015年頃には75%に達するだろうといわれている。アドミッション・オフィサーの仕事は、高校での成績（特に、大学進学用の科目の成績）とこれらテスト点数を中心に入学者の選別するのだが、表1にあるとおり、それ以外にさまざまなファクターを考慮してアドミッションを出す。全科目のGPA、クラスの中でのランキング（トップ5%、10%以内とか、25%以内、など）、1本から3本のエッセイ（テーマを与える大学も、特定しない大学もある）、そして高校教員や進学カウンセラーの推薦状はきちっと見ら

れるし、その中から煌めくもの、訴えるもの、意欲が伝わるものを探ろうとする。

その決定の仕方は、大学によって大いに異なる。一定の方式によって、コンピュータで点数を出しそれに従って決める大学もある。一人の志願書類（ファイル）に2人のアドミッション・オフィサーが眼を通し、学習意欲やリーダーシップなどの重要要因を引っ張り出し、分類してゆき、最後には判定会議で全てのアドミッション・オフィサーとディーンが合議して決定する大学もある。ある一定の人数に達したあとでは、第1回目の決定では入学許可にならなかった学生を補欠（waiting list）の中で上位に入れることもある。

こうして、アメリカの大学進学を考える高校生は多くは3から6校程度の大学に志願書を出し書類を完成させる。入学許可が出た大学のなかから自分に最も適していると思われる大学を、つまり、規模、専門分野、寮生活やキャンパスの生活、授業料と奨学金、などを考慮して選び、預託金（deposit）の支払いを決める。2007年秋学期の4年制大学への新入生の調査は面白い学生の考えを示してくれる（表2）。数値の絶対値やその男女差、または順位をいかに読み取るかは一様ではないだろうが、以下の点は興味深い。男子の値が女子に比べて特に高いのは、16. 運動部、体育会からの勧誘であり、逆に女子の値が男子に比べて高いのは、17. 宗教・信仰との関連、である。男女の差がほとんどないと考えられる項目は、6. 社会的活動の評価、10. 全国誌上でのランキング、19. 高校教員の勧め、20. 親戚の勧め、および、21. 個人的進学カウンセラーの勧め、である。いずれにしても、高校生はさまざまな理由から自分の進む大学を選んでいることがよく分かるだろう。

一方大学にとっては、提出された願書の総数（A）の中から、入学許可者（B：アクセプテッド）を決め彼らにアドミッションの手紙を送るが、その中から最終の入学手続きをする学生（C）が決まるが最後は学生が大学を選択する。アドミッションの仕事は、（B/A）を厳しくできるだけ低くし、（C/B）を高くしたい、Cの新入生の数がある

⁵ 実際は、カレッジ・ボードやACT, Inc. のような機関からの正式の成績報告書を直接大学に送付するように手続きする。成績は、受験生の承認のものだけ外部に出すことが出来る score choice というオプションは、2002年に中止されたが、2009年春から再開された。

表2 学生が実際に入学した大学を選んだ理由のうち重要なもの

(%)

理 由	全体	男子	女子
1. 学問的評価が高い	63.0	57.2	67.6
2. 卒業生が良い職を得ている	51.9	47.3	55.6
3. キャンパス訪問が良かった	40.4	34.4	45.2
4. 奨学金など財政的援助をもらった	39.4	34.8	43.1
5. 大学の規模が自分に適している	38.9	31.4	45.0
6. 社会的活動で評価が高い	37.1	35.2	38.6
7. 学費面の考慮から	36.8	32.7	40.1
8. 卒業生がレベルの高い大学院/専門職大学院へ入学している	34.1	29.3	38.0
9. 家族の近くだから	19.2	15.3	22.3
10. 全国誌のランキングで	17.6	17.3	17.9
11. ウェブ上の情報で	17.0	13.7	19.6
12. 両親の勧め	13.0	11.6	14.2
13. 早期アクションや早期決定で入学許可が出たから	11.4	10.0	12.5
14. 第1志望校に入れなかったから	9.7	8.0	11.1
15. 高校のカウンセラーの勧め	9.0	8.3	9.5
16. 体育・運動部の勧誘, 募集により	8.3	11.0	6.1
17. 宗教・信仰の関連から	7.4	5.9	8.6
18. 第1志望校から財政援助をもらえなかったから	7.3	6.3	8.2
19. 高校教員の勧め	6.1	5.9	6.2
20. 親戚の勧め	4.8	5.0	4.7
21. (個人的) 大学入学カウンセラーの勧め	3.2	3.2	3.2

(注) 2007年秋学期4年制大学への入学のフルタイム学生, 新入生, 272,036人 (356大学) の調査より。

(出所) The Chronicle of Higher Education, Almanac Issue, 2008-9, August 29, 2008, p.18より。

原出所は, Higher Education Research Institute (UCLA), *The American Freshman: National Norms for Fall 2007*, The CIRP Project, January 2008. である。

一定水準に留めることが重要である。その結果、アクセプタンス率 (C/A) は低いほうが競争率が高く、大学の厳選度が高いという一般的な指標として使われている。たとえば、(B/A) で表されるアクセプタンス (受入れ) 率は、プリンストン大学、ハーバード大学やイエール大学などでは、9~10%である⁶。全米でトップランキングのリベラル教育大学のウィリアムズ大学 (Williams College)、アマーフト大学 (Amherst College) やスワスマア大学 (Swarthmore College) などでは19%程度である⁷。

州立ではたとえば、ニュー・ジャージー州のラトガース大学 (3キャンパス合計) では2007年秋

入学に、志願者数4万2101人のうちアドミット (アクセプテッド) は2万3776人でアクセプタンス率は56%であった。そのうち実際に入学登録したのは9169人で歩留まり率は39%であった。また、オハイオ州のオハイオ州立大学はコロンバス校のみで、2007年秋入学では、1万8286人が志願書類を完成させ、そのうち1万2417人にアドミッションが出た⁸。したがってアクセプタンス率は67.9%であった。アクセプタンス率が20%というのは、志願者総数のうち5人に1人に対して入学許可が出て、これが50%は2人に1人に入学許可がでるということである。これらの関係は以下のように表される。

⁶ U.S. News & World Report, *America's Best Colleges*, 2008 Edition, pp.80-81。

⁷ 同上, pp.86-87。

⁸ 同上, Directoryより筆者計算。

新入生のうち出身高校で成績のトップ10%以内
いた学生のパーセントである¹⁰。残りの10%がア
クセプタンス率、すべての志願者のうちの何%が
入学許可を得たかの割合である。これら三者で全
体のうちの15%の比重を持つ。つまり、ランキン
グ付けには、統一テストの点数そのものは、

$$15 \times 0.5 = 7.5\%$$

に相当する重み、重要性が与えられている。

進学を考えている高校生、その親、高校のカウ
ンセラーや教師にとって、このランキングを見な
がら、本人が入学許可を取れそうで、その中でよ
り順位の高い大学へ志願書類提出を目指すこと
になる。その際、1つのしかもかなり簡便なイン
ディケータとして、SATやACTの点数の範囲
(トップ75%~25%)が広く使われてきた。学生
や進学カウンセラーにとっては、それぞれの高校
生の統一テストの点数の取れ具合と照合して、ア
ドミッションが出そうかどうかの1つの目安とし
て、参照されてきた。

さて一方、大学のアドミッションズ・オフィス
からの観点では、表1で見たように、統一テスト
の点数はかなり重視されているといえよう。表1
では第2位でパーセントも高いが、本稿のはじめ
に述べたように、この点数だけでアドミッション
を出すかどうかを決める大学はほぼ無いと言って

よい。筆者がフルタイムで教えた3つの大学でも、
アドミッション・オフィサー達は多くの書類を読
みファイルを作り、エッセイを読み、推薦書の文
面から学生の個性を引き出し、高校4年間の勉学
を含む生活の態度や、失敗から学んだ経験、課外
活動や他人との協働プロジェクトへの参加などか
ら人格像を見出してゆく。統一テストの成績はそ
の中の1つでしかない。オフィサー達は皆、SAT/
ACTの点数は重要であるがそれだけで決定する
ことはない、とすべての面接に来た高校生と親に
説明会で明言する。筆者が訪ねたハーバード大学
でも、MITでのオフィサー達も、案内してくれた
在学生もそのように明言していた。

後に第4.1節で検討されるアドミッション・オ
フィサーの調査から、統一テストの位置づけをみ
ることが出来る(CHE, May 2, 2008)。この調査で
は、アドミッションで統一テストが重要であると
考えている回答者は87.6%あり、彼らの大学は
SATかまたはACTの点数提出を要求している。
表3のパネル(A)からみて、逆に、統一テスト
の点数を必須としないと回答した人は11.8%であ
る。しかし、さらにパネル(B)をみてみると、テ
ストの点数を大学として使う(if your institution
uses standardized test scores,)ならば、その影響
(influence)の大きさを答えているが、ほとんど
か全く影響なし(1.と2.)で50.7%、ある程度

表3 標準統一テスト点数の扱い

(A) アドミッション・オフィスの政策として、点数提出は必須か。

	%
1. 点数提出を必須要件とする	87.6
2. 提出は必須ではない (提出されたら、アドミッション決定に参考にする)	7.4
3. 提出は必須ではない (提出されても、アドミッション決定に使わない)	2.4
4. 統一テストの点数はアドミッションの決定に無関係	2.0
5. 報告なし	0.7

(B) 機関として統一テスト点数を使う場合、アドミッション決定にどの程度影響するか。

	%
1. 全く影響しない	31.5
2. ほとんど影響しない	19.2
3. ある程度影響する	32.5
4. 大いに影響する	16.8

(出所) CHE (2008), B15より筆者作成

¹⁰ 地域グループには、高校でのトップ25%が使われる。

と大いに影響がある（3.と4.）で49.3%となっている。点数がアドミSSION決定に対して持つ重要性のある／なしでは、ほとんど二分の一で拮抗しているといえよう。

3. 統一テスト不要アドミSSION

3.1 アドミSSIONの動向

全米で高等学校卒業生数は2008～09年でピークを迎え、333万人と推計されている。大学進学率はまだゆっくりと上がっていきと言われているが、大学間に改めて危機感と責任感の高まりが見られる。危機感とは、大学生数の伸びが減少することで学生獲得競争が激化することである。責任感とは、高等教育界でアメリカの大学が、特に学士課程の質の維持という観点から、社会に対して負っている責務の念と、世界に対してそれを背負っているという自負感でもある。

こういった状況の中で、統一テストについて、特にアドミSSION側からの大きな動き、変化が最近報告されている。アメリカの大学の学士課程（undergraduate）でのアドミSSIONの任務と仕事、そしてその中に占める統一テストに対するさまざまな考えと論争がなされてきた。論争に対して、SATやACTも自ら改革、変化を遂げてきている。

表4に、2008年秋の大学志望者向けの全米の主な大学、学士課程で、志願書類（application file）の完成に統一テストの点数が必須かどうかの大学数を州別に示した。これらは、*US News & World Report*のアンケートに答えた範囲内での集計であるので、不明とはそのアンケートに答えなかった大学数を示している。答えた限りでは、以下のようなことが見られる。SATかACTかどちらかの点数を要求している大学が圧倒的に多い。明示的に指定している大学でSATかACTかでは、17校：43校とACTのほうが多く、SATの3倍となっている。どちらも必須ではなく統一テストの点数を要求しない大学もかなりあり、表4では、212校となっている。何らかの点数を要求する大学と全く要求しない大学では、1155校：212校となり、この比率は85：15である。

これらの数や比率は、大学の規模やタイプなどとはほとんど関係なく、地域性にもあまり関連性は無いようだ¹¹。しかし、大学数の多い州ではテストの成績を必須としない、出さなくても良い大学の割合が低い。例えば、カリフォルニアでは21.7%で、マサチューセッツでは19.7%、ニュー・ヨークでは29.5%であり、ペンシルバニアでは17.6%である。大学数の少ない州、例えばメインではこの比率は43.8%となっている。そこで恣意的ではあるが、大学数50以上の8州と20以下の20州における、どちらも不要（出さなくても良い）とする大学の割合（不明を除く）の平均を出してみた。前者の18.1%に対して、後者は23.9%であった。ついでながら、筆者が気がついたところでは、マサチューセッツ州のMITでは、今では統一テストは要求されていない。

アドミSSIONというプロフェッショナルの人々の間での最近の顕著な課題は、SATかACTかという問い方ではなく、統一テストがそもそもどこまで志願者の能力・学習意欲・人格特性など、大学へ入ってからの授業や学問的追究など、広く大学生活・経験に対して準備ができていないかを、測れるのかという基本的な疑問である。さらに、各大学が入学させたい学生のタイプ、質など、欲している学生像、大学のビジョン、伝統と特徴に合致し、それを理解していそうな学生にアドミSSIONを出すという目的に、テストはどこまで役に立っているのかという反省がある。つまり、大学の特徴と強調する点と、学生の持つ性格、望む大学経験のイメージとの、この両者のマッチングというアドミSSIONズ・オフィスの根本的責務に対して、テストの成績を出させ、それを使うことで、意図とは逆に入学してくる学生に偏りが生じ、4年間のキャンパスでの生活でうまく適合できないような学生が増えることになっているのではないかという疑問が大きく問われてきている。今世紀に入って、アドミSSIONの決定プロセスにおけるSAT/ACTの意義、役割に関して激しい論争がなされる中で、中等教育までの段階で大学準備のための学習の成果をどこまで、いかにして測れるのかという疑問の高まりと、統一テストを

¹¹ 地域的には、伝統的にSATの受験生は東海岸、西海岸とテキサスで比較的多く、ACTは中西部とテキサス以外の南部諸州で多いとみられてきた。

表4 入学志願書類に必須統一試験(州別、全米)

(大学数)

州名	SAT	ACT	どちらか	どちらも不要	不明	合計
アラバマ	0	2	20	3	1	26
アラスカ	0	0	4	0	1	5
アリゾナ	0	0	3	2	1	6
アーカンソー	0	0	14	2	4	20
カリフォルニア	1	0	64	18	7	90
コロラド	0	0	15	0	3	18
コネチカット	0	0	16	3	1	20
デラウェア	0	0	3	1	1	5
ワシントン D.C.	0	0	6	1	3	10
フロリダ	0	0	31	5	1	37
ジョージア	1	0	37	2	3	43
ハワイ	0	0	4	1	0	5
アイダホ	0	0	5	1	1	7
イリノイ	0	4	42	7	4	57
インディアナ	1	0	39	2	1	43
アイオワ	0	2	22	3	2	29
カンサス	0	3	16	1	2	22
ケンタッキー	0	1	20	4	1	26
ルイジアナ	0	1	16	1	3	21
メイン	0	0	9	7	2	18
メリーランド	0	0	21	4	1	26
マサチューセッツ	1	0	48	12	7	68
ミシガン	0	3	31	6	3	43
ミネソタ	0	5	23	1	3	32
ミシシッピ	0	1	11	2	1	15
ミズーリ	0	2	28	3	5	38
モンタナ	0	0	6	1	2	9
ネブラスカ	0	1	11	4	1	17
ネバダ	0	0	0	2	2	4
ニュー・ハンプシャー	1	0	8	3	2	14
ニュー・ジャージー	3	0	23	2	0	28
ニュー・メキシコ	0	1	5	0	3	9
ニュー・ヨーク	6	0	73	33	5	117
ノース・キャロライナ	0	1	41	6	2	50
ノース・ダコタ	0	1	7	0	0	8
オハイオ	0	0	49	8	3	60
オクラホマ	0	2	16	4	1	23
オレゴン	0	0	15	3	2	20
ペンシルバニア	3	0	72	16	4	95
ロード・アイランド	0	0	7	2	0	9
サウス・キャロライナ	0	0	25	2	2	29
サウス・ダコタ	0	1	7	2	0	10
テネシー	0	1	32	2	4	39
テキサス	0	1	49	10	7	67
ユタ	0	1	4	4	0	9
バーモント	0	1	6	5	5	17
バージニア	0	0	37	1	2	40
ワシントン	0	0	16	2	1	19
ウェスト・バージニア	0	2	14	4	0	20
ウィスコンシン	0	6	24	4	0	34
ワイオミング	0	0	0	0	1	1
計	17	43	1095	212	111	1478

(注) 大学数は、州立の各大学システム内でそれぞれを別々に数えた(例えば、ニュー・ジャージー州のラトガースやニュー・ヨーク州のCUNY, SUNYなど、それぞれ別のアドミッション・ポリシーを取っているところもあるため、それぞれを1大学とした)。

(出所) U.S. News & World Report, *America's Best Colleges*, 2008 Edition, Directory of Colleges and Universities, pp.126-282, より筆者作成

必須としない大学の増加という動向が顕著になりつつある。

3.2 NACACの対応と統一テスト不要アドミッション

そこで、NACAC (National Association for College Admission Counseling: 全米大学アドミッション・カウンセリング協会) では、アドミッションにおける統一テストの使用に関する特別委員会を組織し、この問題に対する考え方を提示した (NACAC, 2008)。統一テストの使い方、規模、厳選度、理念とミッションなどで異なる各大学の全てに合致するようなやり方はなく、テストの数字が学生のアカデミックな成功を示唆する重要な指標となる大学もあれば、それは高校での成績以上のほとんど何も新しいものは示さないとする大学もある、という認識を明らかにした上で、そこで出された問題点は、以下の5点に整理される：

- (1)統一テストを必須とすることの基礎と意義を常に問いかけ、再評価することが重要。

テストを必須とするか不要とするかは各大学が、それぞれのアドミッション・ポリシーとの関連で決定することである。入学後の学生のプレイスメントやアドバイジング、研究などにとっても、テストは不要であると決めるならば、その他の指標で (たとえば、高校のカリキュラムや成績など) 十分であることを示せば良い。さらに、APテストや科目別テスト、国際バカロレア試験など、高校のカリキュラムによりリンクした試験方法を考えても良いだろう。受験のテクニックに依存せず、高校の普段の科目内容にそったアチーブメント・テストの開発が将来の方向として考えられる。

- (2)テストの準備とテスト情報へのアクセスで、高校生の間に格差があることを理解し、考慮に入れよ。
研究では、SATの旧1600点スケールで、20~30点は受験のための準備によって得点される傾向が知られている。テストの準備として最終的には

基礎的な知識と能力が重要ではあるが、質問形式、試験の実施方法や、また学生の学習上のスキル、アチーブメント、そしてテストとの慣れ、などの要因が点数にどのように影響するのか、しっかりと調査し、情報を得て共有し、評価する必要がある。

- (3)テストの成績・点数で誤用や間違いが起き得ることに注意せよ。

学生への財政援助や奨学金の決定 (メリット・ベースでは) に、アドミッション用の統一テストの点数を足切り、最低点で区切ることはやめるべきであろう。統一テストは本来高等教育機関の質をはかるようには設計されていない。したがって、委員会は *U.S. News and World Report* 誌に、大学の質を表すものとしてテスト点数の使用の中止を勧める。大学の財政・経営上の健全性、債務・ボンドの格付けについても、入学者の統一テスト点数の使用の停止を呼びかける。州政府当局も、学生のアチーブメントの指標として、特に大学のアカウントビリティ (説明責任) の指標として、統一テスト点数の使用は避けるよう述べている。

- (4)テストの点数の適切な使用について、高校と大学で、特に大学のアドミッション専門家、自らを教育・訓練する機会を確立せよ。

- (5)社会の各層においてテストの点数の違いに関する理解を深め、高等教育のより広い社会的目標との関連で、テスト点数の使用を評価・確認することを常時行うことが必要。

テスト点数が、所得階層、親の教育、人種、男女やその他高校での成績、州ごとのテストなどどのように関連しているか、さらに大学1年次のGPAとの相関がどの程度あるのか調査、研究されねばならない。社会での少数グループ、マイノリティーの点数に配慮することが必要である

う。アドミSSIONの究極の使命は、学生が大学でのアカデミックな生活で成功する能力を持つかどうかを見ることにある。

これらの検討に基づき、協会が将来の方向として推薦するのは、入学者の選抜(アドミSSION)に現在のSAT/ACTにこれまでのような重要性を付けるのではなく、高校のカリキュラムにより沿ったテスト、たとえば、AP(アドバンスト・プレイズメント)テストや科目別テスト、IBテストや、州ごとの高校最終テストなどを使うことである。この方が、より公平で、学生の高校での学びを良く反映しており、大学への準備度(college readiness)をより良く示すようなテストの開発、設計が望まれるとしている。

マサチューセッツ州にあるホーリィ・クロス大学(College of the Holy Cross)は、2005年4月に統一テストの点数をアドミSSION書類に必須でなくするポリシーを採用した。その根本的な理由は、(1)学生の能力と大学生活の成功をより正確に測る指標が存在すること、(2)テストの点数は志願者のこれまでの経験、学習、達成を決して伝えるものではないこと、(3)テストの点数からは勤勉・刻苦勉勵の意欲(a willingness to work hard)と学習への意欲(an eagerness to learn)は分からないこと、(4)テストで点を取ることに上手な人だけに偏る可能性が高く、人間的な幅の広さを見られなくなる可能性があること、そして(5)テスト必須は、テストへの準備ができる学生、所得の高い層出身者に有利になること、であるという。

アドミSSIONズ・ディレクターのアン・マクダーモットは、志願者の学習の記録(成績と科目)および質的な評価をテストの点数より重視してきたこの大学では、志願者の成績表、エッセイ、個人面接などから、アドミSSION決定のための一層良い判断が出来るとしている。実際、点数なしで入ってきた2006年入学生から08年までの3年間続けた新入生は、以前の年次入学生グループに

比べて出身地域および人種構成でも、より多様性が高まっている。そして、これら新入生はそれぞれの高校でより多くの生徒がより厳しい科目をとってきており、入学後も教員からの報告では、彼らは授業により熱心で、よりはっきりと目的意識を持って、大学生活・大学経験を楽しみ、学び、コミットしているという(McDermott, 2008)。他にもテスト点数の提出をオプションとし、必須にしない大学も増えている(例えば、マサチューセッツ州のスミス・カレッジやノース・キャロライナ州のウェイク・フォレスト大学など)。マクダーモットは、このアドミSSION・ポリシーの変更で、批判もあり注意しなければならない点もあるとしているが、SATの文章力テストでさえ学生を書く力を正確には表さず、むしろ点数なしで個々人のファイルの詳細に見てゆくアプローチこそが志願者の真の能力を見ることになることを確信している¹²。

SATもACTも必須ではない、統一テストの点数を要求しない、つまり入学許可を出すかどうかにかかわらず統一テストの数値は無関係であることを公にする、そういう大学が少しずつではあるが増えている。アドミSSION・オフィサーにとって、テストの点数が高い学生を入学させることは、平均値を上げて自分の大学の外見(社会的評価)を良くするという魅力があるだろう。点数をフィルターにして、足切りに使うことは、他の方法よりも少ない時間と努力ですむという利益もあるだろう。しかし、それは学生にとっても大学にとっても最良の、最も望ましいことではない。個々の志願者を一人一人みてゆくアプローチはより多くの時間と努力を確かに要求するが、それが大学へ志願してくる高校生の潜在能力を本当に全人的に見極める唯一の方法であろう。

2009年2月にカリフォルニア大学(University of California)はその9校の学士課程への入学に、SATの科目別テスト(旧のSAT II)点数(2科目)を必須としないことを決定した。これは2012年秋の新入生から適用される。この変更はここ10~15

¹² 注意点としては、(1)自分の大学の特性、特徴にしっかりと固執せよ、(2)学生を良く知ることが大事(ホーリィ・クロスでは、授業でしっかり学び、書くこと、知的な探求、これらが大学での生活、大学経験を成功に導く)、(3)テスト点数を不要とすることはアカデミックなレベルを下げるのではないかという非難があったが、きちっと対抗できるようにしておくこと、であるという。

年できわめて大きなアドミッション・ポリシーの変更である。2001年頃からSATの公平性、有効性などについての疑念から始まったこの論争は賛否両論があり、まだ終わることはないだろうが、カリフォルニア大学は学生の社会階層や人種、能力でより多様性の大きい、よりカリフォルニア州に合った学生構成になるだろうと予測している。アドミッションにどのテストが最適で、それをどう使うべきかに対して決まった答えはない。この決定は、NACACの推奨する、テストを必須でなくするという方向で、カリフォルニア大学がそのアドミッション・ポリシーを見直し、現状で自身に最も適した方法を選択したことになることと評価されている (Keller & Hoover, 2009)。

以上この節で議論してきたことから、大学入学者選抜における統一テストの点数の扱われ方は従来に比べ相対的に軽くなり、テストの形態の変化とともに、今後多様化するであろうという主張をしておくことが出来る。

4. アドミッション・オフィサーの役割

4.1 プロフェッションとして

全米で1371大学から2081人のアドミッション・オフィサー（管理職およびシニア・ポジションにいて、ディーンやディレクター、マネージャーと呼ばれる人々）を対象とし、そのうち461人（22.2%）から回答を得た最近の調査がある¹³ (CHE, May 2, 2008)。多くの場合、タイトルにはアドミッションだけでなく、Enrollment management（入学・学生登録のマネジメント）やFinancial aid（財政支援と奨学金）担当の長という肩書きがついている。彼らは、大学へ入る学生の門番（gatekeepers）であり、自大学の教育上の価値の推進者でもある。そして、究極的には、組織としての大学の経営と最終的な収益の守護者でもある。

この調査によると、アドミッション管理者達の一番の関心事は、高騰する授業料などの学費、学生リクルートのための費用の上昇と学生を引きつけるための資金援助と奨学金プールの減少（つま

り、affordability と cost) であるという。全回答者のうちの34%がこのことを心配事としてあげている。特に、ハーバード大学やその他の資金に余裕のある、エンダウメントと呼ばれる大学基金で裕福な大規模大学や有名大学が奨学金を増やしているのは、他の小規模な大学や豊かでない大学にはプレッシャーになっているという。

彼らが重要視するその他の課題としては、(1) 高校生や親などの間で一般に存在する、大学アドミッションに対する誤解や不理解に対処すること、(2) 近い将来に見込まれている人口構成の変化から、(高校卒業後直ちに進学する) 伝統的なタイプの大学進学者の減少が見込まれており、それに対応すること、そして、(3) アドミッションに対する周りからの高い期待と限られたリソース、が指摘されている。全回答者のうちの32%が表明している上記(1)の課題とは、アドミッション・オフィサーが志願者をどのように評価・審査しているのか、各大学の厳選度の意味や、さまざまなアドミッション基準の相対的な重要度を含む、アドミッション・プロセス全体に対する理解の欠如である。その他で大きいのは、「多くの大学は高すぎて子供を入れることが出来ない」という誤解があり、財政支援や奨学金の仕組みが理解されていないと感じていることである。

表5と表6で彼らの特性、考え方、仕事などについて、男女別と大学のタイプ別に整理したものを示した。表5の第1と第2の項目からは、副学長のタイトルを持っているのは男性の方に多く、ディレクターのタイトルを持つのは女性の方に多いことがわかる。その両方の合計は、男女でほとんど差がない。原因と理由は分らないが、週に50時間以上働いている人の割合は女性の方がはるかに高い（男性70%に対し、女性は81%）。さらに、志願者のリクルート活動に、教員を巻き込み、在校生の手伝いを要請し、外部コンサルタント（数値自体は低い）を使っている人のパーセントは、いずれも女性の方で高い。

表6からみると、年俸10万ドル以上のこれらシニア・オフィサーの割合は、全体でおそらく4割以上となるだろう¹⁴。特に非宗教系の私立大学

¹³ 調査は、調査会社マグウィアー・アソシエイツに委託して、2008年2月26日から3月10日の間にデータが集められた。

表5 男女別アドミッション・オフィサーの特性

(%)

	男性	女性
1. タイトルに「副学長 (Vice president)」を持つ割合	41	33
2. タイトルに「局長 (Director)」を持つ割合	37	46
3. 勤務時間が週に50時間以下の人々の割合	30	19
4. アドミッションのための志願者リクルート活動に教員団 (ファカルティ) を「非常に」または「多く」参加させている人の割合	37	48
5. アドミッションのための志願者リクルート活動に在學生を「非常に」または「多く」参加させている人の割合	51	64
6. 外部コンサルタントを「日常ベースで」使っている人々の割合	7	15
7. 志願者の間で、アドミッションに対するストレスや不安が「非常に増加した」と思う人の割合	16	31

(出所) CHE (2008), B8より筆者作成

表6 大学タイプ別アドミッション・オフィサーの傾向

(%)

	公立	私立 (宗教系)	私立 (非宗教系)
1. サラリー：年俸10万ドル以上 の人の割合	47	31	63
2. アドミッション予算のうち Web やその他の IT 関連への予算割合	8	12	13
3. アドミッションのための志願者リクルート活動に「卒業生・同窓会」を「非常に」または「多く」参加させている人々の割合	11	15	22
4. アドミッションのための志願者リクルート活動に「アスレティックのコーチ」を「非常に」または「多く」参加させている人々の割合	21	61	44
5. アドミッションのための志願者リクルート活動に「教員(ファカルティ)」を「非常に」または「多く」参加させている人々の割合	32	45	47
6. 「能力の高い学生」を入学させる必要を「非常に強く」または「強く」感じている人々の割合	59	41	34
7. IT 環境での大学のサポートに「非常に」または「十分に」満足している人の割合	33	26	40
8. メリット (成績) による奨学金授与に対して積極的な考えを持つ人々の割合	28	52	19

(出所) CHE (2008), B10より筆者作成

でその割合は高い。志願者のリクルート活動 (大学内外) で、卒業生・同窓会、コーチ (監督) や教員の参画・参与をさせているのは私立大学で高い。「能力の高い学生 (high-ability students)」をリクルートし、彼らをさらに多く入学させる必要があると感じている人の割合は公立大学で高い。

最後に、この調査への回答者の属性、特性を、表7からみると、以下のようなことが分る。シニア・アドミッション・オフィサー達は、アドミッ

ションだけでなく、入学・登録 (enrollment) や財政支援と奨学金 (financial aid) の業務を担当している場合が多く、副学長としてのタイトルを持っている人が約四分の一、ディレクターと呼ばれている人々が三分の一以上、そしてディーンと呼ばれている人が約1割いる。

年齢層としては、30歳代23%、40歳代30%、そして50歳代が36%で、この範囲内で89%となっている。男女比では6:4で男性が多い。人種別には圧倒的に白人が多く、黒人/アフリカ系は5%

¹⁴ 表6の第1項目を、表7の(B)で加重平均をとると、42.9となる。

でしかない。

表8と表9を合わせて見てみよう。彼らの勤務年数は、1年以上アドミッション職に勤めている人達がどの勤務年数階層にも幅広く分かれていて、その結果20年以上アドミッションの仕事をやっている人達が37%となっている。そして、管理職と

しての現在のポジションに就いてからの年数は56%が1～5年、20%弱が6～9年、そして10年以上その現在のポストでやっている人は16%になる。アドミッション職の勤務年数は同じ大学であるとは限らないが、現在のポジションは明らかに同じ大学である。この調査そのものからは分らないが、この職能での勤務年数がかなり散らばっているのは、アドミッションのプロフェッショナルとして訓練を受けながら、時には大学を移動したりして、育っていることがうかがえる。

表9から年俸をみると、80%の人達は4万ドルから14万ドルの範囲にいて、とりわけ、6万ドル以上10万ドル未満が43%となっている。15万ドル以上の人々も約12%いるのは、大学のなかでも重要なポジションとして高い位置にいることを示しているのかもしれない。

これらから、浮かび上がってきたプロとしてのアドミッションの典型像としては：白人（89%）で40～50歳代（66%）の男性（60%）で、そのうちの70%が週に50時間以上働いており、20年近い

表7 回答者の特性

(A) シニア・アドミッション・オフィサーの肩書き (admission/enrollment)

肩 書 き	%
ディレクター (Director)	35.2
副学長 (Vice president)	25.8
部長 (Dean)	11.7
その他	26.9
報告なし	0.4

(B) 大学タイプ別分布

タ イ プ	%
公立	33.2
私立 (宗教系)	44.7
私立 (非宗教系)	21.3
報告なし	0.9

(C) 年齢別分布

歳	%
20 — 29	2.6
30 — 39	23.2
40 — 49	29.7
50 — 59	35.6
60 — 65	7.6
65歳以上	0.9
報告なし	0.4

(D) 性別分布

性 別	%
女性	38.8
男性	60.5
報告なし	0.7

(E) 人種/エスニック別分布

グ ル ー プ	%
白人	88.9
黒人/アフリカ系	5.2
ヒスパニック	2.2
アジア系	0.9
多人種 (マルチ)	0.4
報告なし	2.4

(出所) (A) — (E) すべて：CHE (2008), B15より筆者作成

表8 アドミッション・オフィサーの勤務年数

(%)

	アドミッションズ職での勤務年数	現在のポジションでの経験年数
1年未満	2.0	8.9
1～5年	12.4	55.8
6～9年	12.6	19.4
10～14年	18.0	9.5
15～19年	18.0	3.7
20年及びそれ以上	36.5	2.7
報告なし	0.7	0.2

(出所) CHE (2008), B15より筆者作成

表9 現在の年俸

	\$	%
1.	40,000 未満	1.5
2.	40,000 — 59,999	10.9
3.	60,000 — 79,999	22.7
4.	80,000 — 99,999	20.4
5.	100,000 — 119,999	14.5
6.	120,000 — 139,999	12.6
7.	140,000 — 149,999	3.9
8.	150,000 以上	11.5
9.	報告なし	2.0

(出所) CHE (2008), B15より筆者作成

(またはそれ以上) 経験年数を持って、10万ドル近い年俸をとっている。女性のオフィサーもかなりいて(40%)、彼女達は男性に比べて長時間働き、周りの多くの人々(教員、在學生、卒業生)と協働し仕事を進めている。また、年齢や経験、大学のタイプや地域などによっては、15万ドル以上の年俸をもらっている場合もある。大学は彼らの決定によって、受け入れる学生の質・量がともに決まり、入学金・授業料・奨学金などの経営、財務面で大きな部分が支えられているのである。

4.2 ヘリコプター・ペアレンツとステルス志願者

アドミッション・オフィスの仕事は、志願者一人一人の人間を見ることである。志願書類が完成しているかどうかの確認は、一人一人の志願者ファイルについての最低限の業務であり、そのさまざまな書類(エッセイ、推薦書、成績証明書、作品や課外活動でのリーダーシップの経験や、テストの点数など)のなかに「光るもの」、「きらめくもの」があるか、将来の自分像や大学(大学生生活)への期待などを、明確に、論理的に、一貫して説明しているかなどをみる。しかし、書類だけでそういった面を探し、掘り当てるのは容易なことではない。そういった理由もあり、これまで、志願者についての書類以外の情報をさまざまな種類でファイルの中に入れるようにしてきた。キャンパス訪問に来たかどうか、その時にどんな質問をしたか、寮に泊ってどのような感想を持ったか、面接を受けたかどうか、卒業生とのコンタクトは(学外も含めて)あったのか、教員と話をしたか、説明会には出席したか、などがある。最近では、e-mailでの問い合わせがあったか、その通信ではどの程度コミュニケーションが進んだかなども、メモとして残しているアドミッション・オフィサーもいると聞いている。

4.1でふれたクロニクル(CHE, 2008)の調査で、この10年間で、あなたの大学のアドミッションにおいて大きく変化したものは何か、という設問で大きく増加した3項目は次のようであった。(1)志願者の大学の選択・評価での親の関わり・介入の高まり、(2)ステルス志願者(大学と前もっての何らのコンタクトなしで志願書類だけの提出をする者)の増加、そして(3)アドミッション・プロセスでの進学希望者のストレスと不安・苦悩の強まり、

である。

この調査の回答者の50%が(1)についてふれている。アドミッションに関する親の関与がとりわけ大きくなっているという。大学の選択、財政支援と奨学金の獲得、志願書類の提出で、親の口出し・参画が強くなっているというのだ。奨学金について関心を寄せる親が増えているのは確かだが、志願者本人そのものの関与をする親は「ヘリコプター型両親」とも呼ばれている。入学志願者層の親への対応を考え、大学としても何らかの組織的なマーケティング・プランが必要であると考えているアドミッション・オフィサーも増えている。

回答者のうちの41%が、ステルス(覆面)志願者の増加は大きく、問題であるとしている。その他の37%の回答者は、ステルス志願者の幾分か増加を経験していると指摘している。志願書類の提出が、大学との初めてのコンタクトであり、それ以外の接触を持たない志願者である。ネット上での志願書類の提出を認めるようになったこの10年程度の現象でもありとみられる。競争で、ネット提出で志願書類を完成させると手数料免除をするという大学の増加とも対応しているようだ。

しかし、このステルス志願者の増加がアドミッション・オフィスにとって問題なのは、次のような点からである。

- (1)どこまで当大学に来たいのか、興味を持っているのか、どの程度本気なのか(demonstrated interest)が分からない。
- (2)このグループは、アドミッションがでても当大学に入学手続きをし、登録する率(yield rate, 歩留まり率)が低い。そして、
- (3)このグループは、他のグループより平均してSAT/ACTの点数や、高校のGPAが低い。

この、突如、どこからともなく現れた(out-of-the-blue applications)志願書類は、その扱いでアドミッション・オフィスの仕事を複雑にするだけでなく、困難と当惑の高いものをもたらしている。既に述べたように、アドミッション・オフィスの業務の重要な側面は、入学してくる学生の質と多様性の確保である。大学の厳選度(selectivity)を落とすことなくこの確保につとめることに、ステルス志願者グループの増加は複雑な側面をもたらしている。そして、他のグループの志願者より、

大学とのマッチングでの判定が困難で、本人の当大学へ来たいという意欲が見えにくいためと、歩留まりの低さが問題とされている。歩留まり率については、これまで各大学はそれぞれ独自のさまざまな計算と推計の方式に従って、かなり正確に入学者数の獲得に努めてきた。それらの方程式が効かなくなると、働かなくなっていると感じ始めているのである。

ステルス志願者は、全志願者プールの中で、35%にもなる大学もでてきている。調査からは、この割合は公立大学よりも私立大学に多くみられる傾向を示している。アドミッションが出たら入学したいと、それぞれ志願者がどの程度考えているかを示唆する何らかのもの（エッセイ、その他）や、コンタクトなしの理由や状況が分かる情報を得る必要がある。アドミッション・オフィサーの仕事は一層複雑度の高いものとなってきている。

4.3 奨学金

ローンや奨学金にはいろいろな種類があり、高校生と家族はあらゆる手を尽くしてもらえるものを探す。学生の出身の市や州、民間の財団からのもの、連邦政府のグラント、また大学独自のローンや奨学金がある。また、家庭の年収によって一定以下の家族出身者がもらえるもの（need-based）と、親の収入には関係なく志願者の成績によってもらえるもの（merit-based）とがある。

アドミッション・オフィスが出すアドミッションの決定そのものと、ローンや奨学金でどの程度の金額がもらえることになるのかは、直接関わっていない。しかし、志願者およびその家族の観点からは、大いに関連している。志願者にとってはまずアドミッションをもらうこと、そして家族にとっては何らかのローンやグラントをとることが（自費で済ませられる人々を除いて）、きわめて重要である。

過去10年間で、消費者物価指数の項目の中でも、大学の費用の高騰率は他を抜き出して高いと指摘されている。学生へのさまざまな種類の財政援助は着実に増えてきた。しかし、大学での費用（授

業料、寮費やその他のコスト）の上昇は家計の収入の伸びより大きく、負担の大きくなる学生が増加すると見込まれている。2007～08年にかけては、授業料など学費、寮費の伸びはやや落ち着きを取り戻したと見られているが、2008～09年およびそれ以降については、ローン産業の極端な不振が学生へのローンにも大きな影響を与えそうな状況にある。

表10で全米の学士課程における財政援助の状況を示した。連邦政府のローンが約4割を占めている。連邦政府の奨学金（need-based）「ペル・グラント」受領者の金額は14%で、各大学からの奨学金が21%となっている。この3種で、1067億ドルの援助の76%となっている。

各大学は何年かおきに大きな資金集めのためのキャンペーンを行う。卒業生、在校生の親、企業、地域に働きかけて、集めた資金はエンダウメントと呼ばれる大学の基金に繰り入れて、たとえば、寮、体育館、科学実験棟やフットボール・スタジアムの建設や改築などに使う。しかし、最近ではハード面ではなく、新入生や在学学生のための資金援助、ローンの返済を援助したり、特定分野での奨学金を増やしたりするための特別キャンペーンを行ったり、そのような部分を大きくする大学が目ざされている。ところが、所得で決められる連邦政府のグラント奨学金、「ペル・グラント」受領者の総学生数に占めるパーセントでは、状況は決して良くなっていないことが見られる¹⁵。フィッシャーによる分析で、エンダウメントが2006～07年で5億

表10 学士課程での学生財政支援と奨学金

	%
連邦政府ローン	41
「ペル・グラント」	14
各大学の奨学金	21
州政府のグラント	7
民間および雇用主のグラント	7
その他	10
総計	1067億ドル

（出所）College Board, “Trends in Student Aid, 2008”

¹⁵ 1973年から開始された「ペル・グラント」の正式名称は“Basic Educational Opportunity Grants”で推進した元上院議員のクレイボーン・ペル（ロードアイランド出身）の名を取って通称でそう呼ばれている。ペル氏は、36年間の議員生活のあと、2009年1月に90歳で亡くなった。

ドル以上の大学、公立で39校、私立で75校を比較してみた (Fischer 2008)。この「ペル・グラント」受領者比率は、さまざまな同様の指標のうちの一つでしかないが、大学が低所得層出身の学生をどの程度受入れているかを示す指標ではある。2006～07年を2004～05年と比較している。公立大学では平均して、この比率は2004～05年の19.6%に対して、2006～07年の18.0%と下がっている。私立大学では平均して、この比率は14.3%から13.1%へと減少を示している。全体として、アメリカの学士課程在学生の、低所得層学生の比率は悪化していると見られる。

さらに詳しく見てみると、いくつか興味深いことが分る。この2時点でこの比率が上昇した大学は、公立には見当たらない。私立では、5大学がある (アマースト大学、ウィリアムズ大学、ホーリー・クロス大学、プリンストン大学、リッチモンド大学)。これらの大学は、それぞれ特別な配慮と政策方針を打ち立て、全学を巻き込みそれらを実行していることで知られている。一方、この比率の顕著な低下を見ているのが公立でデラウェア大学、私立ではカルテック (カリフォルニア工科大学) の2校である。以上は比率の変化を見たが、「ペル・グラント」比率の数値そのものをみて25%以上の大学を探してみた。公立と私立でそれぞれ2校しかなかった。公立ではUCLA (カリフォルニア大学ロスアンジェルス校) とフロリダ州立大学である。私立では、ケンタッキー州のベレア・カレッジとマサチューセッツ州のスミス・カレッジである。これら4校とも、これまでそれぞれさまざまな奨学金制度を考え、実施してきている。ベレア・カレッジは、「ペル・グラント」比率は80.8%から77.4%に落ちてはいるものの、他の大学より飛び抜けて高い数値を持ち、伝統的にいわゆる「サービス・ラーニング」の理念を貫いており、入学許可を出した志願者には学費なし (つまり全額、何らかの奨学金、グラントを大学が保証する) で有名な大学である。

表2からみると、奨学金などの財政支援は学生の大学選択に大きな影響を与えている。表6の第8項目は、これまでの所得ベースの奨学金や財政支援策に加えて、「メリット」つまり成績によって決める奨学金、財政支援策の必要性を感じているアドミッション・オフィサーがかなりいることを

示している。特に、宗教系の私立大学でその傾向が強い。全体ではおそらく三分の一の人々が、メリットによる奨学金、財政支援を支持しているだろう。これは従来の傾向、つまり奨学金や財政支援は低所得層へのニーズに基づくものに限定されるべきであるという考えに対する修正とも考えられる。大学間の学生の質と人数への競争と、コスト削減と大学運営の生き残りなどがそういう動きを生み出しているといえるだろう。

こうして、本節での議論から、アドミッション・オフィサーの仕事、役割はますます複雑になり、そして、重要なものになるといえよう。重要となる理由には、以下のような要因が考えられよう。

- 大学進学率の上昇は、家族・親族の中で初めての大学進学者を大学は迎えるので、本人も親も大学というものの経験がない人々の増加を意味する。
- 奨学金の給付・受け取りが、入学する大学を決める要因としてより大きくなりつつあり (CIRP, Freshman Survey)、それが大学間の学生獲得競争の一つになっている。
- アドミッションのディーンと財政援助のディーンを兼ねている、あるいは一つのポジションとしている大学はかなりあり、在学生の奨学金給付やローンの貸し付けの大きな部分は、新入生へのそれらの決定と連動している。
- 奨学金給付の基準も、need-based (親の所得) と merit-based (本人の成績) の間で、全米で揺れ動いており、大規模で豊かな (エンダウメントの大きな)、そして有名な (そして、おそらく卒業生からの寄付の多い) 大学は、気前よく奨学金の基金に出すことができる。
- 各大学の生き残りそれぞれの mission の達成のために、新入学生の選抜という大学の入口での業務のしっかりとした遂行は、大学の基本的活動である質の高い教育と研究への、良質の原材料、大学の特徴に合致した素材を提供するという意味で重要である。

アドミッション・オフィサーの仕事が、特に、1990年代と2000年以降いよいよ、複雑化し、大学

全体にとって重要性を増していることを述べた。

5. おわりに：今後の課題

本稿の論点は大きくは2つであった。まず第1に、入学者の選抜における統一テストの点数の扱われ方に関して、ゆっくりとではあるが大きなうねりのような変化、多様化について検討してきた。第2点は、アドミッション・オフィサーの責務と役割が、複雑化してきていることと、大学経営に対する重要度を増していることを整理した。両方の観点から見えることは、各大学がそれぞれさまざまな工夫を凝らそうとしていることであろう。

以上の議論から、アメリカの大学においてアドミッション・オフィスが、そしてアドミッション・オフィサーが直面するであろう将来の課題が浮かび上がってくる。

まず第1には、統一テストの点数の扱いである。点数の提出を要求している大学でも、実際にはほぼ半数のアドミッション・オフィスでは使っていないし、見ている場合でもその比重は低下の傾向にある。志願者の人間をみる時にこのテストの点数にどれだけの意味を持たせるのか、それとも全く点数なしでアドミッションの決定をおこなうのか、これからは使うにしろ使わないにしろ、各大学がそれぞれ独自に自らその意義を明確にした上で、公表することが重要となるであろう。

第2に、アドミッション・オフィサーの役割はますます複雑、重要、多様になると考えられる。その時考慮しなければならない要因は、学生の人種別構成、出身地域の広がり、親との関係、財政支援策や奨学金に関する説明と決定など、大学運営にとって大事なもののばかりである。高校卒業生の減少が予測されている中で、新規高校卒業生の獲得競争は激しくなるであろう。アドミッションとしては、このような伝統的學生と、その他の社会人、編・転入学生、地域でのリクルートなどからの学生と、どのようにバランスをとるのかという問題も生じてくるだろう。

アドミッションという職能集団にいる人たちはプロとしての誇り高く、とてつもなく多忙な専門職生活を送っている。いくつかの大学を移動しながら、経験を積み高い給料を取るポジションに移っていく人もいるに違いない。このグループの中での、成功者とは何なのか。困難な状況の中で、

先に述べたように、入学生の質を落とすことなく（アクセプタンス率を低く）、そして歩留まりを高く（イールド率を出来るだけ高く）して、長期的に当大学の特徴と伝統を高く保持することに役立ち、学問上と教育上のこの世界での評価、評判を高めることに貢献することである。

しかしながら、ペレッツ（CHE, November 14, 2008）も言うように、最終的に彼らを支えているのは、学生リクルートにおける個人的なコンタクトからくる、個々の学生に、その人生に影響を与えたという達成感、充実感、そして学生からの感謝の念などが届けられる「少ない瞬間」など、人生における他人との協働作業で、自分の仕事に人に影響を与えているという実感であろう。真剣に、真面目にアドミッション業務をおこない、それが学生の人生に影響を与えている、4年間の“life changing experience”をもたらしていると、実感できる職業にいたることが彼らを支えているようだ。

参考文献

- 松井範惇 (2004) 『リベラル教育とアメリカの大学』 ふうろう出版, 146p.
- 松井範惇 (2006) 「アメリカの大学教育システムは日本の大学に有用か」『大学教育』第3号 (山口大学 大学教育機構) 2006年4月 (1~22)
- Greland, Hunter, James Maxey, Renee Gernand, Tammie Cumming, & Catherine Trapani (2002), *Trends in College Admission 2000: A Report of a Survey of Undergraduate Admissions Policies, Practices, and Procedures*, March 2002
- The Chronicle of Higher Education (2008), “Admission & Student Aid,” May 2, 2008 Supplement
- De Vise, Daniel (2008), “ACT or SAT? More Students Answering ‘All of the Above’” Washington Post, November 12, 2008, A01
- Fischer, Karin (2008), “Top Colleges Admit Fewer Low-Income Students: Pell Grant data show a drop since 2004,” The Chronicle of Higher Education, May 2, 2008, A1, A19-20.
- Hawkins, David A. & Jessica Lautz (2005), *State of College Admission*, a NACAC Research, Alexandria, VA, NACAC, March 2005
- Karabel, Jerome (2005), *The Chosen: The Hidden*

History of Admission and Exclusion at Harvard, Yale, and Princeton, Houghton Mifflin

Keller, Josh and Eric Hoover (2009), "U. of California Adopts Sweeping Changes in Admissions Policy," *The Chronicle of Higher Education*, February 13, 2009, A33-34.

McDermott, Ann B. (2008), "Surviving Without the SAT," *The Chronicle of Higher Education*, October 10, 2008, A41.

Micceri, Ted (2001), "Facts and Fantasies Regarding Admission Standards," Paper presented at the AIR Forum. Long Beach, CA, June 3-6, 2001

National Association for College Admission Counseling (2008), *Report of the Commission on the Use of Standardized Tests in Undergraduate Admission*, Arlington, VA, September 2008

Perez, Angel B. (2008), "I'm Tired, and So Are You: For people in admissions, fall means almost nonstop travel, and it's easy to forget why the work matters," *The Chronicle of Higher Education*, November 14, 2008, A50.

Swann, Claire C. (senior editor) (1998), *Handbook for the College Admissions Profession*, Westport, Conn.: Greenwood Press.

Zwick, Rebecca (2007), *College Admission Testing*, a NACAC commissioned report, February 2007

(受稿日 平成21年 5月18日)

(受理日 平成21年 9月30日)

[ABSTRACT]

New Issues of College Admissions and Admissions Officers
in US Colleges and Universities

MATSUI Noriatsu *

The duties, responsibilities, and roles of admissions officers are very important to US colleges and universities, and they are becoming increasingly diverse. As a professional group, the foremost job of such officers is to grant admissions to new entrants, including first-year and transferring students. However, they are facing new and previously unknown situations that are becoming increasingly diverse, among them a decrease in future high school graduates, harsher competition among colleges and universities, the need to cope with a varying body of new students, increasing parental expectations and intervention, and a depleting pool of scholarship funds.

This paper considers recent trends and arguments about the roles of standardized tests in undergraduate admissions in the US, and argues that admissions policies are changing and becoming increasingly complicated and multiplex.

Furthermore, new issues that admissions officers are facing (and will face in the future) are discussed together with an introduction to their characteristics and natures in the job environment. It is argued that the already demanding work of admissions officers will become more challenging and complex.

* Professor, Department of Research for University Evaluation, National Institution for Academic Degrees and University Evaluation

